
帝丹小演劇祭

紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝丹小演劇祭

【Nコード】

N0146A

【作者名】

紅葉

【あらすじ】

帝丹小学校で演劇祭と言う祭りの行事がある。その劇でコナンが怪盗キッド役をやらなくてはいけなくなってしまった。そのころ本物の怪盗キッドは父を殺した敵をやっと見つけた。今、二つの舞台が動き出す。

始まり

帝丹小学校では毎年、演劇祭と言うお祭り行事がある…。その頃怪盗キッドが現れ、華麗に宝石を盗む泥棒として世間を騒がせていた…。

「みんな席につきなさい！みんなは初めてだから知らないけど、帝丹小学校では毎年、演劇祭って言う祭りがあるのよ。だから今年ももちろんあります。みんな何やりたいですかあ？」

「なにがいいですかねえ歩美ちゃん」

「私、怪盗キッドの劇やりたあーい！」

「えー！？」

「わー面白そう！さんせーい」

クラスの皆が賛成をしまいコナンはため息混じりの顔になった
「マジかよ…（よりによってなんであいつの主役の劇なんだ…！？）」

「クスッ」

「じゃあ決定ね！」

「わーいコナン君！怪盗キッドの劇にきまったよ」

「あ、ああ…よかったな…」

「うん！」

「じゃあ、台本ができるまで待っていてね」

「はい！」

この時、この劇が事件につながるなんてだれも考えていなかった。

帰り道

「劇、楽しみだなあ」

「楽しみですねえ」

「うな重でねえかな」

「でねえって…」

「灰原さんも楽しみだよね！」

「ええ、どんな舞台になるか楽しみだね。ね、江戸川くん。」

「そうかあ。俺はあんまり興味ねえなあ…」

「なんて事言うんですかコナン君！」

「そうだぞ！せっかく歩美が考えたのに」

「あ…ああ。ごめんごめん、俺が悪かったよ。ごめんな、歩美ちゃん」

「ううん、平気だよ」それから二日後、先生が台本を書き上げてきた。

「台本出来上がったのでくばりますね！」

「はあーい」

そして、皆に台本が配られた。

歩美や元太、光彦は話にはなをさかせていた。怪盗キッド役や探偵役がやりたいなど会話が聞こえてきたりする。コナンは、その様子をほほえましくそのようすをみていた。

「これから役を決めたいと思います！ここにクジがあるから一人ずつ引いてもらいます」

「はあーい！」

それから次々とみんなクジを引いていった…少年探偵団のみんなも引きおわってみんなコナンのまわりに集まってきた。

「みんなみたか？」

「まだ、みてません」

「私もみてない」

「俺もみてねえ」

「私もよ」

「じゃあみんないつせいにみようぜ！いつせーのせつ！」

みんな、いつせいにクジの紙を開いた…。

「みんなどうでした？」

「私、警察官」

「おれ宝石を狙われてる人の役」「僕は探偵でしたよ」

「いいな、光彦君に似合ってるよ！」

「本当ですか（照）」

「で、コナン君と哀ちゃんどうだった」

「私も警察官だったわ」

「やったあゝ一緒だゝゝ頑張ろうね！哀ちゃんゝゝ」

「ええ」

「それで、コナン君はどうでした？」

「……」

コナンは一人でショックをうけていた…探偵の俺が劇てはいえ、なんでこんな役をやらないといけねえゝんだよと思い悩んでいた。

「コナン君！コナン君！！」

「あ、ごめん…なんだ光彦？」

「役なんでしょう？」

あまりにみせたくなさそうなコナンをみて皆でコナンの紙をのぞいた

「どれどれ…えつと…え?!怪盗キッド役…?!」

「ええ〜!」

探偵団を含めてクラス全員がコナンに注目した

「コナン君にぴったりじゃん!」「どこが!!(あゝあ、こんな劇、やりたくねえ)。あ。当日休むのもありか)」

「江戸川くん」

「なんだよ。灰原」

「いま卑怯なこと考えていたでしょう?」

「う”…へいへい、卑怯な事はしませんよ」

そんな話をしてるなか先生が話はじめた。

「はゝい!みんなクジ引きおわったわね!じゃあ前の席から順に何役か言っついてってください!」「ぼく、音量係」

「わたし、照明係」

と順々に聞いていった。

「明日から劇の練習をするので台本読んどいてくださいね!」

「はあゝい!」

始まり（後書き）

どうでしたか？といっても最初の方は、ちょっと…（泣）ごめんなさい（泣）でもこれからが本格的です！…！よかったらこれからもみていってくださいm（――）m

出会う

「コナン君、怪盗キッド役だね！主役、いいなあ。でも、怪盗キッド役はコナン君が一番似あってるよ」

「あははは（苦笑）」

学校が終わりコナンは探偵事務所のソファで台本を読んでいた。

「… かつたりーなあ（つてか、よりによってなんで俺が怪盗キッド役なんだ？まあ、引いたのは自分だからしょうがないけど…）」
はあゝとため息をついた…と、同時に蘭が帰ってきた。

「蘭姉ちゃん、おかえりなさい」「ただいま、コナン君。お父さんとは？」

「また、麻雀やりにいったよ。」

「そうなんだ…」

「コナン君、今日の夜ご飯なにがいい？」

「なんでもいいよ」

「じゃあシチューでいい？」

「うん」それから小五郎はいないがいつものように夕ご飯をたべていた。

「そういえば、さっきソファに台本が置いてあったけどなにかやるの？」

「う、うん… 学校で演劇会があるんだ」

「懐かしいなあ…、で、コナン君達はどんな劇やるの？」

「怪盗キッド…」

「怪盗キッド？」

「怪盗キッドを主人公にした舞台をやるんだって」

「へへ、かわってるね」

「ほんとにね…」

「で、コナン君は何やるの？」

「…え」

「いいじゃない。教えてよ」

「…怪盗キッド役」

「へえへ！すごいじゃない！当日見に行くからね！頑張ってるね」

「う、うん…」

その後、コナンは台本に少し目を通して寝た。次の日に運命の出会いをするとは知らずに…。「皆さん、台本ちゃんと読んできましたか？」

「はい！」

「じゃへさっそく練習をはじめますよ」

「はい」

「じゃあ、一番始めからね！役の人集まって！」

先生の所に集まり、劇の練習が始まったがコナンはやる気がなく先生に言われまくって帰る頃には疲れていた。

「コナン君、台本棒読みだったよ！先生もちよつと怒ってたし…」

「あんまやる気なかったからな…」

「やる気ださなきゃダメだよ！みんなに迷惑がかかったちゃうよ！」

「そうですよ！」

「そうだぞ！」

「…わへつたよ。明日からちゃんとやるよ…」

そんな事を他愛のない話しながらみんなと別れコナンは一人、帰ってる途中に台詞を覚えてしまえと台本を手にして読んでいた。

その途中、向こう側から一人の高校生が歩いてきた。何事もなく高校生が通りすぎた後、急ものすごい風が吹いてコナンの手から離れて台本がとんでしまったが、高校生がちょうどその台本をキャッチしてくれた。

その高校生は台本を返してくれるとおもいきやめくってみていた。

「…ごめんなさい。それ僕の」

「はいよ。ボウズ」

コナンは台本を高校生からうけとりお礼をいった。

「それ…舞台の台本だよな？」

「そうだよ。それがどうしたの？」

「怪盗キツドの舞台をやんのか？」

「うん」

コナンの目がどんどん鋭くなっていく。

「ところでお兄さんだれ？」

その言葉を聞いた途端、急に手を前に出してきて、マジシヤンのように一輪の花を出してきた。

「おれはこっという者だ」

「こっという者ってマジシヤン？」

「そう。」

「へー。すごいね。それじゃあ、僕用があるから。台本拾ってくれて、ありがとう」

興味なく返事をしたあと、見知らぬ高校生に付き合ってられないと帰ろうとしたら…とめられた。

「ちょっと」

「…なに？」

「い…いやおま…ぼっずは手品できるか？」

「できないけど、それが？」

その言葉にコナンの目がまた鋭くなる。

「ぼうずが怪盗キッド役だろ？」

「…そうだけど何で知ってるの？」

「さっき台本をみたときちよろつとね……、で、マジックとかできない怪盗キッドはなあ…」

「…さっきから何がしたいの？お兄さん」

「俺が教えてやるっていいんだよ」

「は？なん…」

「さ、話が決まれば、行こうぜ。俺は黒羽快斗。よろしく」

そしてコナンは半強引に連れていかれた。コナンも気になる事があったから黙ってついていった。それから何分歩いただろう。ある一つの家の前についた。

出会う（後書き）

どうでしたか？よかったら感想（？）ください…（泣）お願いしま
す！！

正体（前書き）

こんにちはー；もみじです；；；
二年かん放置しました。っですが今度という今度は完結させます！
修正してすこし話がかわってしまいました；が、見守って頂ければ幸いです；

正体

「ついたぞ」

「…」

快斗が案内をしてコナンは家にあがった…。

「おじゃまします…」

「今、母さん買物に行ってる。当分帰ってこないから。」

「…」

廊下を歩いてる途中、マジシャンの格好のした人の写真がかかって
いた。

「…この人」

「俺のオヤジ。有名なマジシャンだったんだ…」

「へー…」

「そこらへんに座っててくれ」

おとなしく快斗の言うことをきいて待つていた。もしかしたらその
後に何か起こることを感じていたのかもしれない…。

快斗がコーヒーを持ってコナンが座ってるほうに来た。

「ほら」

渡されたコーヒーとにらめっこしているコナンをみて「なんにもは
いってねえから」と快斗がいうと口をつけはじめたしばらく無言が
続いたが、コナンのほうから快斗に聞いてきた。

「…俺をここに連れてきてどーゆーつもり？」

「いや別にマジックを教えようと…」

「うそつけ」

「…う」

「正直に話した方が身の為だぜ」

「わかった！ちゃんと話すから」

それから怪盗キッドを狙う組織がいる事。父親が殺されたことを話した。

「…で。それを話したってことは俺になにか協力してほしい事があるんじゃないのか？」

「…」

「次に狙う宝石が組織の標的…とか」

「…」

怪斗の目が鋭くなる。

「で、俺は何をすればいいんだ」「…協力…してくれるのか？」

「ああ。ただし、これは貸しだからな。」

「ああ…すまねえ、名探偵」

それから快斗がこれから起こる事、作戦をはなした。

「マジかよ」

「マジだ」

「おれマジックなんてできねえーぞ」

「大丈夫。俺か教えてやるから」「うえ…」

「それじゃあ、早速始めるか」

それから一週間、快斗のスパルタ練習にコナンが寝不足になったが、だれもを騙せるマジックができるようになった。

「もともとセンスはあったからな」

「るせー」

そんな他愛のない話をしているが勝負は明日。

当日

次の日の朝、コナン達のクラス1年B組は衣装の最終チェックと舞台の流れの最終チェックのため早めに学校に集まっていた。

「はい。お疲れ様でした。あとは劇でも緊張せず同じ調子でやるんですよ」

「はい」

少年探偵団がコナンのもとに集まってきた

「コナンくん」

「歩美ちゃん」

「コナンくんやっぱりキッドの服、似合ってるよ」

「はは。ありがと。歩美ちゃんも警察服にあってるよ」

「ありがと」

赤く頬を染めたところで光彦と元太がヤキモチをかいてつつかかってきたが、うまくかわして席についた。隣に警察服を着た灰原が座っていた

「灰原もその服似合ってるぞ」

「…ありがと。たまにはこういうのもいいかもね。」

「ああ、そうだな・・・」

それから間もなく全校生徒の体育館移動が始まった。そこを覗く黒い影が数人。

…そう快斗の作戦ももう始まっていたのである。

それから数時間、続々と劇がはじまり、とうとう今やっているクラスの下がコナンのクラスまできた。

「うわー、緊張する」

「大丈夫ですよ歩美ちゃん」

「そうだね！みんな頑張ろうね」

「はい（おう）」

そんな中コナンは一人神妙な顔をしていた。

「どうかしたの？あなたらしくもない顔しているわよ」

「そうか？」

「ええ」

「心配掛けてワリーな。大丈夫だから気にすんな」

「・・・」

そうこうしているうちにコナン達のクラスの番がきてしまった。

「1年B組のみなさんおねがいします」

その声にクラス全員が緊張したがコナンの「緊張しないで、楽しくいこーぜ！」の言葉にクラス全員の緊張がほぐれた。

「コナンくん、がんばってね！」

「ああ」

そして1年B組の劇が始まった。

動き

「レディース&ジェントルマン、今宵の晩、月夜に浮くダイヤモンドを奪いに太陽が沈む時に参上いたします。とくにご覧あれ」

その言葉と同時に白い煙りがでたと思うと花が体育館中に舞った。コナンの言葉とマジックを合図に1年B組の舞台が始まった。

コナンは怪しい視線を感じていたが、なにこともなく舞台は順調に進み最終のシーンまで無事にきた。

「これか、月夜に浮くダイヤモンド…」

天井にダイヤモンドをかざした時、今まで感じていた視線が殺気が含まれた視線にかわった。…そう、コナンがもっているダイヤモンドは組織が求めているダイヤ…本物なのだ。

「待て怪盗キッドっ!!」「誰が待ちますか?警部殿。それでは私はこれにて失礼いたします」

コナンが何かを下に投げ付けると白い煙幕がからだを包みコナンは姿を消した。それと同時に「ちっ」という舌打ちが重なった。

煙幕と同時に舞台裏の二回に隠れたコナンは快斗に連絡をする。

「こっちは一様順調だぜ、そっちは?」

「ああ。あと少しだ。名探偵、気をつけろよ」

「ああ、わかってるって何かあってもいいように舞台裏の2階にいるし」

「…すまねえな、名探偵…」

「なんだよ。急に…」

「いや…」

「困った時はお互い様だし、これは貸しだからな。俺が万が一手をかしてもらいたい時はちゃんと働いてもらうからな」

「ああ、…ありがとな」携帯のやり取りが終わり2階から客席を覗くと男達の姿はなくコナンは周りの人を巻き込まないように2階の体育館の外にいた。

男たちがコナンを見つけ、まわりにあつまってくる。

「おいボウズ」

「なーに？」

「さっきのダイヤモンドみせてみる」

「おじさん達だれ？」

「いいから早くよこせっ！！」

「…いやっていったらどうする？」そうしたらお寝んねしてもらうしかないなるな」

そっぴいながら拳銃をだす。

「えへへへ」

「なにがおかしい」

「そう簡単に捕まってたまるかよ」

その言葉と同時にキッドの衣装についていたハンググライダーをだして飛んだ。

「逃がすか！」

「…っ！！」コナンに向けて拳銃を発砲する。コナン華麗によけていたが、一発だけ足にあたってしまった。

ハンググライダーも拳銃の玉のせいでボロボロ。近くの人通りのない公園におり、快斗に連絡した。

「どうした？」

「わりー少しかけ…しくじった」

「大丈夫か?!」

「ああ。あとは計画通りすすんでるから…」

「気をつけるよ…」

「ああ。…後は任せたぞ」

その言葉を最後にコナンは携帯を切った。

計画（前書き）

すみません（涙）
今回は短いです・・・

計画

電話を切りおわった直後、コナンのまわりに男達が集まってきた。

「さあ、渡してもらおうか？」

「……」

「早くしろ！」

「……やだね」

「なに?!」

「いやだつていつてんだ」

「死に急ぎやがって」

男が拳銃の引き金に手をかける

「あ、別に殺すのは構わないけど、さっきのダイヤ、僕がある場所に隠したから僕を殺すとダイヤの場所がわからなくなるよ」

「うそつけ」

「嘘だと思えば撃てばいい」

コナンは鋭い目をして相手を見る。緊迫感ただよう無言の時間が何分か何秒が続いた後、相手が動いた。

「……わかった。信じよう。じゃあ何処に隠した」

「僕をあんたたちのボスの所に連れていつてくれたら直接ボスに話すよ」「それはダメだ」

「なんで？」

「ボスに合わせるわけにいかない」

「……それじゃあダイヤのありかもわからずじまいだね」

挑戦的な眼差しで相手を見る。

「……」

それから男達で何かを話しあっていた。話が終わったのかコナンに話かける。

「いいだろう。ただし……」

その言葉と同時にロープで縛られ、何かをかがされ意識が遠くなる。
「いくぞ」

言葉を合図に車に乗り、何処かにむかって走りだした。

実行1（前書き）

またもや短いです……すみません（

；
）

実行1

「名探偵：無茶させてすまねえ……」

そう。コナンに盗聴器、発信機をつけていたのだ。

数時間、人気のない所までつれていかれ何処かの工場で止まった。

「おいボウズ起きろ」

そういわれながら、男に抱き抱えられボスの所：工場の最も奥の方に連れていかれた。

「ボス」

「…ダイヤは？」

「このボウズが…」

「ボウズ？」

「こんにちは。おじさんがこの人達のボスなんだ」

ボスに会った途端、一瞬にして嫌な気配を感じた。

「なんだこいつは」

「い、いや。こいつが例のダイヤを持っていきまして…連れてこねえと教えねえと言われてしやって…。ダイヤは何処だ？」「その前にロープはずしてよ。足怪我してるんだし動けないんだから」

「だめだ。早く言え！」

「えー。わかったよ…。場所はねえ、体育館裏の…」

言おうとしたその時、何かが足元にとんできたと思ったら白い煙りが周りを囲んだ。

そのとたん、俺を捕まえていた男が呻き声をあげ倒れ、違う男に抱き抱えられていた。

「名探偵、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だから早くロープを…」

「わかった」

ロープを外してもらい自由になった身体を動かし、部屋を逃げながら快斗につたえる。

「あのボス、結構厄介…」

「ああ、だかそれも想定内。大丈夫だ」

「ならいいんだけど…」コナンは嫌な気配を感じてから不安な気持ちを抱えていた。あとでそれが的中しなければいいなと思いながら…。

動き2（前書き）

またまた短いです；
すみません；；

動き2

「奴らはどこに行った？」

静かな殺気のある言葉で下っ端が問いただされる。

「今探していますが、まだ見つかっていません！」

「そうか。あの小僧をここに連れて来たやつはどこに行った？」

「あそこに…」

「呼んでこい」

「はい」

コナンを連れて来た男がボスの前にきた。

「ボス…」

「お前か、ここにあいつを連れてきたのは」

「……はい」

その直後、その男はボスに撃たれてしまい倒れた。

「ボスっ!!」

「確かあの小僧、学校の体育館裏とか言っていたな」

「はい…」

「どこの学校だ」

「確か…帝丹小学校だったと」

「そこに行け」

「え?!」

「いいから行けと言っているだろう」

「わ、わかりました!」

一方コナン達はアジトから無事に脱出してキッドのハンググライダー

―で空を飛んでいた。

「無事に脱出できたな」

「ああ。ただこれからが問題だ」「これからの前にまず足の手当からだ」

近くのビルに降りてコナンの足の具合をみる

「このぐらい平気だ。それより…一旦帝丹小にもどしてくれ。途中でぬけてきてしまったから」
「わかった」

コナンと快斗は帝丹小に向かいはじめた。

危機

コナン達は帝丹小に着いて、過保護かと思えるくらいコナンを心配する快斗をおいて授業に戻った。

快斗もしようがなく諦め、一旦家に帰ることにして帰っていった。

「コナンくん、どこに行ってたの？急にいなくなったからビックリしたんだよ」

「そうだぞコナン」

「また変な事件にくびつつこんでいないでしょうね」

「悪かったって。くびつつこんでねえから心配すんな」

こんな他愛のない話が続き、あっという間に下校の時間になったが探偵団のみんなと帰ろうとした瞬間、殺気のある視線を感じ、理由をつけて今日は探偵団と帰らず一人事務所に向かつてあるいて帰っていった。

その後ろから後をつけている気配……。快斗ではないとすると……奴らしかない……。とりあえず事務所に向かわず道を変え様子を伺っていたが、背後に気を取られすぎていて前からきた奴に気づかず、気づいた時には遅く薬をかがされ、気を失ってしまった。

一方、快斗はコナンと別れてから最後の戦いに向け作業を行っていた。

コナンに盗聴器をつけ、何かあってもいいようにすぐにでれる準備もしていた。その盗聴器に異変が起きてしまった……。

コナンが奴らに連れ去られたのだ…。

コナンの危機に快斗は直ぐさま向かいはじめた。

一方コナンは奴らのアジトに連れて来られ、目を覚ました時には手が柱に鎖で縛られ身動きがとれなくなっていた。

「お目覚めかな」

奴らのボスが現れた。

相変わらず嫌な感じだなとコナンは思っていた。

コナンは相手に鋭い目つきを向ける。

「俺をどうする気だ」

「どうもしないさ。お前がもっている宝石の隠し場所をいえばな」

「…」

「早く言ったほうが身の為だぞ」

「やだね」

そういった直後、左肩を撃たれてしまった。

「今は軽く撃っただけだ。早くいったほうが身のためだぞ」

「嫌だと言っているだろう」

その途端、今度は右肩を撃たれた。

「そうか。そんなに死にたいのか」

「死ぬ気はさらさらないし、おまえに言った所でもどうせ殺されるだろ」

「ふっ…」

その直後、右脇腹、足など3発ほどくらった。

「…っく」さすがに撃たれすぎて、意識が朦朧としてきていた。

「これが最後だ」

拳銃を向けられ、撃たれる寸前、白い姿が見えた。

戦い（前書き）

矛盾点が結構ありますがお許しくださいませ m (m

戦い

「死ね」

奴が引き金をひこうとした時、怪盗キッド：快斗が現れた。
トランプ銃で相手の拳銃を落として俺に近づき鎖を外す。

「大丈夫か?!」

「…ああ。なんとかな…」

「やっと現れたな怪盗キッド」

拳銃を拾いながらキッドを睨み付ける

「……」

「毎度毎度、俺達が盗もうとする宝石を盗み、一度殺ったと思えば不死身のようにでてきやがって、あげく手にいれようとしていたパンドラまでも盗み、もうあのお方に合わせる顔がない」

あの方という言葉に反応したいが血を流しすぎて身体が動かない

「血を流しすぎて貧血だろ。端で休んでろ。しかも今回は俺の獲物。手出し無用だ。それに…親父の敵だ…!!」

「ああ。ただ油断するな…気をつける…」

そうついいながら端に移動した。

「親父の敵させてもらうぜ!」

キッドは完全に頭に血が上っていた。

この様子でいくと、このままじゃまずいと感じていた。

「ふつ。出来るものならやってみろ。怪盗キッド、もう一度死ね!」

アジトに残っていた仲間がぞろぞろと出てくる。
キッドに皆かかって向かっているがアジトから出てきたやつらはキッドに全員やられた。
残ったリーダーが発砲するも「甘い」と難無くかわしている。…がそれに違和感を感じる。

銃撃戦が続き荷物が散乱している場所についたとき相手の目つきが変わった。その瞬間なにが起こるのか想像がついた。「逃げる！！」叫ぶと同時に怪我をしていることもわすれキッドの元へ駆け寄り突進する。と同時に荷物が散乱していた場所が爆発した。
キッドは守れたものの、俺は爆風に飛ばされ壁にたたき付けられた。肋骨…何本か折れたな…。
血相を変えて快斗…キッドが来た。

「大丈夫か?!」
「…大丈夫だ。ただ、あいつは思っている以上に手強い可能性がある。…冷静な判断。それにこんな血相をかえた怪盗キッドをみたらファンがなくぞ。…どんなときでも、ポーカーフェイスを忘れるな…」

その言葉が目を見開く。
それと同時に親父の言葉と重った。
「どんな時でも…ポーカーフェイスをわすれるな…か。…悪かったな。今度こそ俺に任せてくれ!」「…ああ」
そのあとのキッドの速さは凄かった。冷静になったあとはトランプ銃で相手の銃を落とし、予備の拳銃も落とし、マジックを上手く使い捕まえられたのである。

「警察は呼んである。観念するんだな」

「ふっ…それはどうか…」

その言葉が終わると同時に発砲音が聞こえ…捕まえた男が倒れた。心臓に一発くらって即死。

その一瞬の出来事にコナンも快斗も目を見開き、周りを見渡すも誰もいる様子がなかった。

遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

「…とりあえず、帰るか」

「ああ」

コナンと快斗はこの場を後にした。

去ったその後、証拠隠滅のために奴の仲間たちが建物ごと爆発してなにもかもなくなったことはコナンも快斗もニュースで知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146a/>

帝丹小演劇祭

2010年10月10日22時01分発行